

学年		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
育てたい力		楽しさ、できる喜びを感じ、向上心をもって運動に親しもうとする力								
重点指導目標	学びの視点	各種の基礎を培う時期				多くの領域の学習を経験する時期			卒業後少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期	
	ボール操作	●簡単なボール操作ができる。		●基本的なボール操作ができる。		●簡易化されたゲームでの基本的なボール操作ができる。		●空間に走り込むなどの攻防に応じたボール操作ができる。		●空間を作り出すなどの動きを用いて、攻防に応じた安定したボール操作を行うことができる。
	ゲーム	●的に当てるゲームができる。 ●簡単な攻めと守りのあるゲームができる。 ●鬼遊びで、一定の区域で、逃げる、追いかける、陣地を取り合うなどができる。		●易しいゲームができる。		●簡易化されたゲームができる。		●身に付けた技能を用いてゲームが展開できる。		●作戦を立て、状況に応じた技能を活用し、仲間と連携したゲームが展開できる。
ボール操作	シュート	●ねらいを定め、緩やかにボールを投げる、転がす、蹴ることができる。 ・大小、弾む・弾まないなど、いろいろなボールで、つく、転がす、投げる、当てる、捕る、蹴る、止めるなどボールをよく見て、両手足や体のいろいろな部分を使って簡単なボール操作をする。 ・肩の上又は腰の横で、片手にボールを乗せ、もう一方の手で軽くおさえてセットし、ねらった方向をよく見て、ゆっくりと投げたり、転がしたりすること。または、ねらう方向を確認し、ボールをよく見て、ボールの横に足を置き、足の内側やつま先をボールの中心に当てる。		●ボールを持ったときにゴールに体を向け、ゴールに向かってボールを投げるができる。 ・攻めるゴールや陣地を意識し、ボールを受けた際、攻める方向を向き、シュートなどの準備をする。		●シュートの仕方を理解し、その技能を使い、シュートができる。 ・両手でボールを頭上又は胸の前で構え、スナップをきかせながらゴールに向かってシュートする。		●守備者がいない位置でシュートができる。 ・ゴールを見て、膝を曲げてゴールの真上に放物線を描くようにゴール下のシュートをする。(ゴール下ジャンプシュートや中距離のセットアップシュート) ・しっかりとステップを踏んで腕をゴールに近づけるようにしてレイアップシュートを打つ。		●守備者が守りにくいタイミングでシュートが打てる。 ・ボールを受け取ったら素早くシュートを打つ。 ・フェイクやステップを使ってシュートする。 ●ゴール枠内への確実なシュートが打てる。 ・ゴールを見て、シュートフォーム、リリースポイントを一定にし、ボールが同じ軌道を通過するようにする。 ・利き手と逆の手でのレイアップシュートをする。
	パス			●味方に手渡したりパスを出したりすることができる。 ・ボールを手渡したり、出したりする方向に片足を踏み出しながら、素早く投げる。		●フリーの味方へのパスができる。 ・近くにいるフリーの味方にパスを出すには、コールを聞く、周りを見るなどする。 ・フリーの味方を見付け、パスする方向に上体をひねり、両手でボールを操作して相手の胸を目がけて投げる。(チェストパス)		●マークされていない味方へパスを出すことができる。 ・味方が走り込む前方に合わせて、相手にとられない速さのパスを出す。 ・パスを指でしっかりとキャッチする。 ●得点しやすい味方へパスを出すことができる。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すには、パスを受け取った際に守備者の足元にバウンドさせたり、守備者の後方へ浮かせたりして、味方が走り込む前方へパスを出す。(チェストパス、バウンズパスやショルダーパス、オーバーヘッドパスなど)		●味方が操作しやすいパスを送ることができる。 ・動きに応じて、胸や頭のあたりに正確にパスを送る。 ・ディフェンスを自分に引き付けてパスを出す。
	キープ	●ボールを捕る、止めることができる。 ・ボールに正対して構え、ボールをよく見て、へそより上で捕る場合は両手の平を縦に、下の場合は、ボールは指を下にして捕ること、または足の裏や内側の側面で止めたりする。 ●相手をかわす動きができる。 ・相手(鬼)にタッチされたり、自分のマーク(タグやフラッグ)を取られたりしないように、逃げたり身をかわしたりする。 ・動く速さを変えたり、左右にジグザグに走る。		●ボールを持ったときに相手のいない方でボールを保持することができる。 ・相手を背にしたり、相手のいない方に動くなど、相手からボールを遠ざける。		●相手にとられない位置でのドリブルができる。 ・相手にとられない位置でドリブルするには、顔を上げて前方を見ながら、空いている場所にコントロールしやすいスピードで運ぶ。		●相手にとられないドリブルができる。 ・相手の前にボールを突き出さないこと、ボールを突いていない手でカバーする。 ・どちらの手でも、ボールを強く低くついて前進する。 ・ドリブルからジャンプストップ、ストライドストップする。		●守備者とボールの間に体を入れてボールをキープできる。 ・守備者を背にして立つこと、ビポットを有効に使用する。 ・フロントチェンジやバックチェンジなどを使って相手を抜き去る。
主な単元		ボール遊び・ボール投げゲーム・鬼遊び		ポートボールなどを基にした易しいゲーム 検証Ⅰ		バスケットボール		バスケットボール 検証		バスケットボール

体育・保健体育部会

育てたい力

楽しさ、できる喜びを感じ、向上心をもって運動に親しもうとする力

1 連携のねらい

現代における体育科の課題として、「運動する子供とそうでない子供の二極化傾向」、「子供の体力の低下傾向」、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力が十分でない状況」などが挙げられている。

これらの課題を踏まえ、新学習指導要領における体育科の改善の基本方針については、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視」し、「心と体をより一体としてとらえ、引き続き保健と体育を関連させて指導すること」とし、また、「学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る」としている。

本部会では、これらのことを踏まえ、小中学校義務教育の中で生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するためには、仲間とのかかわり合いを豊かにして、一人一人の技能を向上させ、運動する楽しさや喜びを味わわせることを通して、児童・生徒の意欲を高めていくことが大切であると考えた。

そこで、本部会の研究テーマを「楽しさ、できる喜びを感じ、向上心をもって運動に親しもうとする力の育成」として、体育・保健体育部会では小中学校での指導のつながりを重視して研究を進めてきた。

研究に当たっては、仲間とのかかわり合いや技能の向上、運動する楽しさや喜びを味わわせるという視点から、小学校の「ゲーム（ゴール型ゲーム）」・「ボール運動（ゴール型）」から、中学校の「球技（ゴール型：バスケットボール）」について、主にボール操作（シュート・パス・キープ）に視点をあて、その系統性を実証することとした。

2 具体的な手だて（基礎・基本の充実に向けて）

小学校では主なボール操作について、幅広くボール運動の基礎を培うことを意図した「ゲーム」領域で第1学年から第4学年で取り上げている。また、各型の特性や魅力に応じたゲームを行い、型ごとに共通する技能などを身に付けることを意図した「ボール運動」領域を小学校第5学年及び第6学年で取り上げている。そして、小学校高学年の「ボール運動」の学習における基本的な技能を発展させて、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できるように中学校の「球技」に発達段階及び学校段階の接続に応じて指導内容が示されている。

特にこのことを基に、小学校から高等学校までの12年間の発達の段階の指導内容を整理し、「体の基本的な動きを身に付け、各種の運動の基礎を培う時期（小学校第1学年から第4学年）」、「それぞれの運動のよさなどを踏まえた上で将来に向けて運動を選択できるようにしていく力を養う時期（小学校第5学年から中学校第2学年）」、「生涯にわたって運動を豊かに実践するための基礎となる知識や技能を身に付ける時期（中学校第3学年から高等学校卒業年次）」の3つの段階における技能の向上に視点を置いたつながりある指導について研究する。

検証授業Ⅰ

単元名「ゴール型ゲーム」(小学校第3学年)

1 小中連携の視点

体育科ゴール型ゲームは、学習指導要領に「基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすること。」と記されており、主として集団対集団で競い合い、仲間と力を合わせて競争することの楽しさや喜びを味わうことができる運動である。そのような球技の特性に触れて、楽しさを体験するためには、その球技独自の基本的な技能の習得が不可欠である。3年生の重点指導目標には、「基本的なボール操作ができる。」とある。今回は、基本的技能の中のシュート時にゴールに体を向けることに重点を置いた。技能を着実に習得させていくためには、発達段階に応じた適切な運動課題の経験を通して調整力を高めていくことが大切であると考えた。そこで、体育部会では、チームや自己の課題を互いに協力し合い解決していく学習過程を尊重しつつ、技能の習得に焦点を当てた。

2 具体的な手だて・指導の工夫

(1) グループ活動による話し合い、かかわり合いの重視

- ・ゲームに出る人数を1チーム4人に設定し、一人一人がボールに触る機会を多くした。
- ・チーム内で作戦の振り返りやよかったことを発表し合いチームへの所属意識を高めた。
- ・全体場でよかったことを発表させ、自分のチームに生かそうとする態度を育てた。

(2) 規則の工夫

- ・全員がシュートを入れたらボーナス得点を与えることで、全員がシュートする機会を増やすようにした。
- ・ドリブルは禁止し、パスのみでゲームを行わせることで、ボールを持っていないときの動きも意識させた。また、パスカットのみでのゲームにすることで、ボール運動が苦手な児童の恐怖心を和らげさせた。
- ・全員が同じように楽しむために、自分たちで規則を工夫させた。

(3) 場の工夫

- ・1試合の運動量が多くなるように、コートの大さを考慮した。
- ・ゴールサークルの後ろにもスペースをとることで、ゲームの動きに幅をもたせた。
- ・1つのコートの中でゲームの対戦をローテーションさせ、移動時間の削減と運動量の確保を図った。

3 授業の考察

- (1) 今回の授業では、ゲームの中でドリブルがないことから、ボールを持っているときや持たないときの動きが難しい。例えば、ボールを持たない時の動きを身に付けさせるための手だてとしてグリッド線をつくることや、5秒ルールのようなものを手だてとして取り入れることも考えられた。
- (2) 今回の大きなねらいとして、楽しさ、できる喜びを感じ、この力を小学校から中学校につなげていくというものであった。そのため、技能に焦点を当て、得点が生まれる環境をいかに作っていくかが大切であった。その点で考えるとシュートする、ゴールを工夫して得点生まれやすいようにすることが必要だったかもしれない。

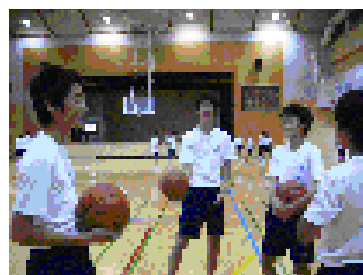
検証授業Ⅱ

単元名「球技 バasketボール」(中学校第2学年)

1 小中連携の視点

球技は、ボールを媒介として、個人や集団の技能と作戦を生かした攻防を展開しながら、得点を競い合う楽しさや喜びを感じることができる運動である。したがってそのような球技の特性に触れ、楽しさを体感するためには、その球技独自の基本的な技能の習得が不可欠である。このことから本研究では、技能の習得に向け、自己の能力に適した課題を互いに協力し合って解決していく学習過程を学習の基本とした。

また、一方では中学校段階では生徒たちに多くの運動を経験させて基礎的な技能や知識を身に付けさせるとともに、能力や適正に応じて主体的に種目を選択して専門性を深めていくことが求められる時期でもある。このことから技能についての系統表を作成し、小学校からの既習事項を踏まえ、ボール操作の正確性や確実性を高めていくことに視点を当てた検証授業に取り組んだ。



2 具体的な手だて・指導の工夫

(1) 既習事項に基づいたドリル学習

シュート・パスについては、小学校から身に付けた技能及び新たに学んだ技能について、ドリル的な練習を組み入れ、短時間で効率よく反復できるように内容を工夫・精選した。

＜仲間同士の技能の助言＞

特に、これまでの両手によるシュートに加え、片手によるレイアップシュートについても、個々の課題を踏まえ、これまで同様にリズムやタイミング、またスナップをきかせ、守備者がいない位置で確実にシュートが出来るように意識させ取り組ませた。

(2) 身に付けたボール操作を発揮できるようなゲームの工夫

ボールへのかかわりを拡大したり、攻撃するためのスペースを広げたり、一人一人の責任と分担を高めるために4人対4人でのゲームとした。また、速攻(パスによる攻撃)が出しやすい条件を作り出すために、得点された後の再開方法についてもエンドラインの外に出ずに、コート内からスローインで再開するなどの工夫をして、身に付けた技能を用いたゲームが展開できるようにした。

(3) 学習過程の工夫

運動の特性に触れられるよう、個人やチームの課題を解決する学習活動を重視し、生徒相互の助言の場やチーム課題への作戦会議を積極的に取り入れた。



＜作戦の確認・声かけ＞

3 授業の考察

本時の授業では、基本ドリルとして、対人パス ワンドリブル→パス ドリブルストップ→パスを、また、シュートの技能向上に向けては、仲間同士で助言させるなど、主体的な学び合いが行われた。ゲームでは、一人一人の技能が発揮できるよう人数を工夫するとともに、「速攻」を本時のテーマとし、本時で身に付けた技能がよりよく発揮できるような工夫がなされていた。さらには、教え合いや作戦会議を多用し、練習やゲーム後の振り返りを次の練習やゲームにおける課題としてつなげていくなど、学習ノートの活用も含め、生徒が自己の技能の向上について確認できるものであった。

検証授業の様子 単元名「ゴール型ゲーム」(小学校第3学年)



検証授業の様子 単元名「球技 バスケットボール」(中学校第2学年)



成果と課題

体育・保健体育部会では、子供たちが楽しみながら学習する中で、生涯にわたって豊かなスポーツライフをはぐくませていきたいという願いから、育てたい力を『楽しさ、できる喜びを感じ、向上心をもって運動に親しもうとする力』として取り組んできた。

主にボール操作(シュート、パス、ボールキープ)の技能について、小学校から中学校での系統を考え、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成の研究に努めた。そして、9年間を見通した子供たちの発達段階に応じた学習内容を明確にし、検証授業を行うことができた。

例えば、小学3年生では、パスやシュートの技能の目標を明確化し練習に取り入れたり、ボールを持たない時の動きの重要性を学んだりすることにより、上学年での学習につなげることができた。

また、小学校で重視しているグループ学習や、教え合いは、中学でも課題解決に向けたチームでの話し合いや作戦会議などにつながり、主体的な学習を促進させるために有効であることが分かった。今回の検証授業では、シュート練習にグループ学習を取り入れたり、基礎的・基本的な技能の獲得のためのドリル練習や競い合いを取り入れたりすることで、チーム内での教え合いもさらに深めることができた。

ただ、小中学校相互に行われた検証授業では、中学校での正式なルールに近づけたバスケットボールへのつながりを見据えると、小学校中学年から「山なりのボールでシュート」「三角形の陣形で攻撃」等、学習中の声掛けやさらなるルールの工夫が課題として見えてきた。中学校でも、小学校で行っている学び合いの学習を、さらにいろいろな場面で活用できるよう、今後とも研究に努めていきたい。